恋つぼみ/沖神/3Z

いとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋つぼみ／沖神／３Ｚ

【Ｎコード】
Ｎ１５１０Ｊ

【作者名】
いとり

【あらすじ】
『恋愛なんて、なければ良いのに……』
失恋、片恋、三角関係…どんどん絡まる赤い糸。ほどけた時、私と繋がっているのは誰ですか…？

第１話（前書き）

ーーーーご注意ーーーー

この小説は沖神ですが、本編とは全く異なった内容になっており、オリジナルキャラも登場しますので、以上の事が苦手な方は、今のうちにお逃げ下さい。

ーーーーーーーーーーーーーー

第1話

『私、鈴って言います。神楽ちゃん…、だよね？これからよろしくね。』

彼に彼女が出来た。

綺麗に巻いてある長い髪、私より低い背丈、小さな顔に大きな目。

彼女は男子の間で、可愛いと評判の子だった。

「お前にあんな可愛い子、勿体無いアル…。」

ふぅー、と溜め息混じりにそう言った。

「……あ？」

「あんなに可愛いと、男なんて選り取り見取りなのに、どうしてお前を選んだアルか？…可哀想ネ。」

「お前…、喧嘩売ってんですかィ？」

「事実を言っただけヨ。」

「歯ぁ食いしばれやコラァ！」

今日もたわいない挑発から始まる喧嘩。

別に彼に彼女が出来ても、この“喧嘩相手”という関係は変わらなかった。

そして、その事に少しの安堵感を抱いたりもした。

クラスメートには『また始まった』と、被害が自分にまで来ないように、わざわざ机ごと移動する者も居れば、教室の外に出て行く者も居た。

自分にとってこの環境は、何だか居心地の良いものであった。

そう、あの時までは―…

『そーちゃん！』

と教室内に響く、ソプラノの声。

彼も私も、すぐに動くのを止め、声がした方を見た。

教室のドアに、1人の女の子が立っている。

―…あの子は―…

そう思ったのと同時に、彼の声が聞こえた。

「…鈴？」

私の胸ぐらを掴んでいた、彼の手が緩む。

『あのね、迎えに来たの。…一緒に帰ろう？』

「あ、わりィ。」

彼の手が、私から離れた。

「明日覚えてろよ、馬鹿チャイナ。」

そう言い残して、彼は教室から出て行った。

そして、彼女が帰り際に私を見て

『神楽ちゃん、バイバイ。』

と、笑顔で手を振ってくれた。

―…いい子、何だろうな。

外に出ていたクラスメートが中に入り始める。

そして、口々に“沖田が羨ましい”、“鈴ちゃんは可愛い”などと言っていた。

―…私も帰ろう。

机の横に掛けてある鞄を取って、教室から出た。

いつもの帰り道を、1人で歩く。

今までは喧嘩相手と言いながらも、一緒に帰っていた彼。

でも、今日からは別々。

彼の隣りは、もう既に埋まったのだから。

「……ふぅ。」

彼が居なくて初めて知る、1人の孤独さ。

―…明日からは、誰か、違う人と帰ろうかな…。

足下の小石を蹴りながら、そう考えていた。

―…そういえば、酢昆布切れてたなぁ。

と思い出して、いつも帰りに寄っていた駄菓子屋に行った。

「おばちゃーん、酢昆布おくれヨ。」

と頼むと、意外な返事が返って来た。

「あら、今日は1人かい？」

「…うん。」

―…今日だけじゃないけどね。

酢昆布を受け取って、1枚口に運ぶ。

「酸っぱい…。」

酢昆布がいつもより酸っぱく感じた。

＊ ＊ ＊

「ただいまアル。」

家に帰って、白髪の男、銀ハに言った。

「お前、今日遅くねーか？銀さん、心配しちゃったよ。」

「…ごめんなさいアル。」

「お前に何かあったら、あのハゲに何されるか……、考えただけでゾッとする…。」

私は元々、中国からの留学生で、親の知り合いでもあった彼の家に、今は一緒に生活させて貰っている。

「銀ちゃん、今日は早かったアルね。どうしてアルか？」

「んー…？今日は午後からの授業なくてな、暇だから帰って来た。」

「だから、放課後に教室来なかったアルか…。」

「…あ、バレた。」

「この馬鹿教師ぃーーッ！！」

「ぎゃあああ！痛いッ！髪の毛引っ張っちゃ駄目！抜ける！ハゲちまうッ！！」

しかも、世話になっている男は担任でもあった。

「ああぁ…、神楽ちゃんのせいで大事な銀さんの髪の毛が…。」

「いい気味アル。」

…先が、思いやられる。

夕食を食べ終え、2人でリビングでゴロゴロしていた。

「……銀ちゃーん。」

「んー…？」

ソファーで寝そべっている銀ハに話し掛けた。

「…アイツ彼女出来たアル。」

「アイツって…誰？」

「…サド。」

―…何でアイツの事、銀ちゃんに話してんだろ。

話してからそう思った。

「サド…あー、沖田君ね！…へぇー、誰と？」

「他クラスの鈴ちゃんっていう子。」

そう言って、帰り際に見掛けた2人の事が脳裏に浮かんだ。

―……？

何だか、苛つく。

「鈴、鈴、…あ！あの男子の中で一番人気の奴だろ？ほぉー、あんなにいい子、沖田君に勿体ねぇなぁ！」

「…だよネ。」

―…どうしたんだろう。

イライラが止まらない。

「でも、鈴ちゃんも鈴ちゃんアル！あんな男の何処がいいんだヨ！あんなに腹黒くて、毒舌で、暴力振るう奴ッ……―」

言葉が止まらなかった。

そしてハッと気が付くと、銀ハが自分をじっと見ていた。

「…な、何アルか？」

「さっきから思ってたんだけど、―……」

「だ、だから何だヨ！？」

私を捉えて離さない瞳。

「お前さぁ…、妬いてんだろ？」

―…妬いてる？

顔が、カッと熱くなるのを感じた。

「…ッ違うアル！！」

そう叫んで、自分の部屋へと逃げた。

壁に凭れると、足の力が抜けて、その場に崩れ落ちた。

『妬いてんだろ？』

さっきの銀ハの声が、耳鳴りのように木霊する。

―…違う、…違う。

膝を抱いてうずくまる。

―…違うッ！！

白い頬を、一筋の涙が伝った。

妬く理由なんて何処にもない。

―…あんな奴、好きでも何でもない。

第2話

―…あんたなんか、好きじゃない。

トボトボと学校の玄関まで歩いていた。

足取りが重い。

『妬いてんだろ？』

―…違う。

昨日から続く問いかけ。

そのせいで、昨日はあまり眠れなかった。

―…銀ちゃんと、顔合わせ辛いな。

そう考えていると、いきなり腕が後ろに引っ張られた。

「！」

ビックリして、後ろを振り返ると、そこには1人の女の子、鈴が微笑んでいた。

『えへへ…神楽ちゃん、おはよう！』

「…おはようアル。」

そう返すと、彼女は照れたように笑っていた。

—…男は、こういうのに弱いのかな。

『神楽ちゃんと朝会うの初めてだね。』

いつの間にか、彼女が隣りを歩いていた。

「…そだネ。」

そわそわする。

彼女が居る所には、何だかアイツが居るような気がして―…

「す、鈴ちゃん…―」

『鈴でいいよ？』

―…そうじゃなくて。

もう一度、声を掛けようとした時、彼女が隣りで手を上げて叫んだ。

『…あ！そーちゃーん！』

ドキッとする。

彼は自転車で、今登校して来たようだった。

そして彼が、私達のもとに近付いて来た。

—…何だか、気まずい。

「おはよ、鈴。……と、馬鹿チャイナ。」

「明らかに嫌な顔すんなヨ…。」

『そうだよ、そーちゃん！神楽ちゃんはとってもいい人だよ？』

そんな事を言われたのは初めてだった。

「鈴、お前それ騙されてんでさァ。コイツはみんなが恐れる凶暴女ですぜィ？」

―…コノヤロウ。

『えー！？、そんな事ないよ？』

―……。

「…私、急いでるから先行くネ？」

『…え、あ、神楽ちゃん！？』

彼女の声を無視して、その場から逃げるように立ち去った。

後ろからは、鈴が彼に怒っている声が聞こえた。

＊　＊　＊

「すげームカつく。」

「……へ？」

自席に着くなり、隣りにいた土方が険悪な表情でそう呟いた。

「…え、トッシー…も、もしかして…サドの事…―」

「ッだあああ！キモい想像すんな！！」

―…だ、だよね。

「…何つうか、鬱陶しい。見てると苛つくんだよ、…あの女。」

―…イラつく？

土方と同じ心境。

「お前は……？」

「え？」

不意に聞かれて驚いた。

「あんな女に、総悟捕られて何とも思わねーのか？」

―…昨日から何なんだヨ。

銀ハも、土方も何故そのような事を言うのだろうか。

まるで、私が彼を好きであるかのように…。

「…ウザい奴が消えて、せいせいしてるアル。」

そうだ、…好きだなんて有り得ない。

「…そんな事より、トッシー。」

「あ？」

「今日から一緒に帰ってヨ。」

「…はあぁあ！？何でだよ！女子居んじゃねーか！」

慌てふためく土方。

「だって…、銀ちゃん家方面に住んでる人、サドとトッシーしか居ないアル。」

「だからって…―」

「私が事件にでも巻き込まれたらどうするアルか！？」

「…わぁーったよ、送ればいいんだろ！送れば！！その代わり、部活終わるまで待ってろ！」

「やりぃ！」

これで帰りは何とか大丈夫そうだ。

＊　＊　＊

土方の部活が終わるまで、教室で待っていた。

―…つまんないアル。

机に突っ伏す。

教室には誰も居らず、シン…と静まり返っていた。

―…野球でも見てるか。

そう思って、窓に近付いた。

夕日の光りを浴びて、よりオレンジ色に輝くグラウンド。

その中に、自転車を引きながら、1人歩いている彼を見つけた。

ドキ…

―…？

何で彼を見る度に、胸が高鳴るのだろうか。

―…別に、用があるわけじゃないけれど…。

更に加速する鼓動。

無意識のうちに、口の側に手を当て、大きく息を吸い込んでいた。

「サ…―」

『そーちゃーーん！』

後ろから、１人の女の子が彼の側に駆け寄って行った。

彼がそれに気付き、後ろを向いた。

「…――。」

見たこともない、彼の笑顔だった。

―…何で？どうして？

自然に頬を伝う涙。

—…苦しい。

また昨日と同じように、その場に崩れ落ちた。

『妬いてんだろ？』

『捕られて何とも思わねーのか？』

またリピートされる、彼等の言葉。

—…違う。

「…好きなんかじゃ……―」

―……ううん、違わない。

認めて、向き合わなくてはならない。

この胸の苦しみと痛みに―……。

これは、…嫉妬だって。

―……私は、アイツが好きなんだって。

第3話

―…どうして、アイツなの？

「神楽さん、おはようございます。」

窓台に肘を置き、頬杖をつきながら、青い空を眺めていた。

「おはようアル、そよちゃん。」

「…何か、ありましたか？」

「な、…何でアルか？」

突然の質問に驚く。

「神楽さん、少し目が赤いです。」

目の前には、心配そうな表情のそよ。

「あ、…昨日ね、銀ちゃんと遅くまでゲームしてたネ！多分それでアル！」

咄嗟に嘘をついてしまった。

―…泣いていたから、なんて言えない。

「…そうですか。あまり、無理しないで下さいね？体に毒ですから。」

「…うん、ありがとネ。」

罪悪感ばかりが、胸に残った。

窓からグラウンドを見ると、登校中の学生の中に、鈴の姿を見つけた。

彼女は何かを探しているらしく、キョロキョロと周りを見渡していた。

―…サドの事、かな。

自分の気持ちを認めた昨日。

それから直ぐに鈴に会う勇気は出ず、彼女に合わないためにも、今日はいつもより学校に早く登校していた。

「こんな所で何してんでィ。」

不意に、耳に聞き慣れた声が入って来た。

―…え？

勢い良く後ろを振り返る。

「…何でィ、そのツラは。」

―…どうして。

いつの間にか、彼が後ろに立っていた。

「お前、何でこんな早くに学校に居るアルか！？」

いつもの彼なら、あと4、5分後に来るはずなのに…。

「あ？今日は朝っぱらから風紀委員が集められたんだよ。あー…、ねみぃ。」

—…それじゃあ、鈴ちゃんが。

「……サド、鈴ちゃんがお前の事探してるアル…。」

校庭に向かって指差した。

―…何で私、あの子のために…。

後になってから後悔した。

―…今は、私が彼の隣りに居るのに…。

彼は、私が指差す方を見て笑っていた。

また、私が見た事もない笑顔で―…。

「アイツ、俺探してるんじゃないですぜィ？」

「…え？」

—…どういう事？

「アイツ、チャイナの事探してんでさァ。」

—…え。

そう言うと、彼が彼女に向かって名前を呼んだ。

その声に気付き、此方を向く彼女。

そして、嬉しそうに手を振った。

『そーちゃん、神楽ちゃん、おはよー！』

可愛らしい、笑顔だった。

「アイツさ、女子に妬まれる事が多くて、女子の友達少ないんでさァ。だけど、そんな自分に気軽に話してくれたのがチャイナだけだったらしいですぜィ？」

―……。

「チャイナと友達になりたいってさ。」

『神楽ちゃんはとってもいい人だよ？』

―…そんな事ない。

涙が出そうになるのを、必死に我慢した。

―…私はいい人じゃないよ？

私に向かって、一生懸命手を振る彼女。

…私も、あなたを妬んでいる女子の１人にすぎないのに…―。

第４話

「…はぁ？友達になりたい？」

「うん…。そう言ってたみたいアル。」

今日の朝の出来事を、隣りの土方に言った。

彼とは一緒に帰れなくなったために、今は家が同じ方面にある土方と帰っていた。

「…よく言えたもんだな、んな事。」

―…？

土方は何故か、彼女の事を嫌っていた。

「…ねぇ、トッシー。」

「あー？」

ダルそうな声。

「何でそんなに、鈴ちゃんの事嫌アルか？」

そう尋ねると、土方は一瞬だけ驚いた顔をし、またいつもの表情に戻った。

「別にいいだろ、…気にすんな。」

―…よくない。

「…よくねぇヨ！！気になるダロ！？さっさと答えるヨロシ！」

「…はぁッ！？……嫌だ。」

イラっとする。

「教えろー！！」

そう言って、土方の胸ぐらを掴む。

「ちょっ…、お前、タ、ンマ！苦し…！！」

土方の苦しそうな声を聞いて、ハッと気付いた。

「ご、ごめ、大丈夫アルか？」

「げほッ…大丈夫じゃねーよ！！お前、マジで殺す気だったろ！？」

そんな事はなかった。

―…分からないアル。

今までなら、どんなに暴力を振るっても、平然としていた彼。

だけど、今の相手は彼とは違う人。

力を入れる加減が分からなかった。

―……。

脳裏に浮かぶ彼。

今頃、彼はどうしているのだろうか。

―…やっぱり、鈴ちゃんと一緒かな…。

「おい。」

土方の声がして我に返った。

「何ボケッとしてんだ、帰るぞ。」

「…あ、うん！」

「……。」

―…今、思い出さなくてもいいのに。

＊
＊
＊

2人で駄菓子屋の前を通り過ぎようとした時だった。

―…あ。

「トッシー、そういえば酢昆布切れたネ。買ってヨ。」

「…俺はお前の財布なのか？コラ。」

「いいじゃねーかヨ、酢昆布ごとき。ケチな男はモテないアルヨ？」

「てめぇ…。」

キレそうな土方をお構い無しに、袖を引っ張って行った。

駄菓子屋ではいつものおばちゃんが迎えてくれた。

「あら、今日はいつもと違う子ねぇ。」

「…ん。」

そう言われると、前に彼とよく、酢昆布を買いに来た事を思い出す。

—…よく酢昆布で喧嘩したな。

今では苦い思い出となった。

おばちゃんに挨拶をして、駄菓子屋から出た。

「…お前、前に総悟と行ってたのか？駄菓子屋。」

買った…買わせた酢昆布を食べていると、土方が突然そのような事を聞いてきた。

「…そうアルヨ。どうしてアルか？」

「いや、別に…。」

—…？…変なの。

疑問に思っていると、いつの間にか銀ちゃん家に着いていた。

「酢昆布ありがとネ。じゃあな…―」

クシャ…

サヨナラを言い掛けた時、土方の手が、私の頭の上に置かれた。

「……。」

「トッシー…？」

私の声でハッと我に返ったのか、いきなり頭を手荒に撫でられた。

「ッぎゃー！！何するアルか！？髪の毛ぐちゃぐちゃアル！」

「わりぃわりィ。」

「悪いと思ってんなら止めろーッ！！」

「…やっと元気になったな。」

―…え？

ぴたっと、彼の手が止まる。

「お前、駄菓子屋に寄った後から元気なかったじゃねぇか。」

「……。」

―…気にしてくれてたんだ…。

「1人で悩んでねぇで、さっさと相談しろよ？」

頭をぽんぽんと軽く叩かれた。

「じゃーな。」

「あ…、バイバイ！」

そう言うと、彼は振り向かずに、手だけ振っていた。

—…なんか、元気出たかも…。

自分の頭に手を置いて、さっきの事を思い出した。

—…大きな、手だったな。

第5話

『神楽ちゃーん！おはよー！』

鈴が走って此方に向かって来た。

今日はいつも通りの時間に登校した。

『チャイナと友達になりたいってさ―…』

昨日、彼から聞いて初めて知った、彼女の気持ち。

―……。

「…おはヨ、鈴ちゃん。」

私の隣りに並んだ時に、そう挨拶した。

彼女はまた、照れくさそうに笑っていた。

『昨日も神楽ちゃんの事探してたの。』

―…知ってる。

『昨日は早かったね。』

「ちょっと、早起きしたアルから…。」

また、嘘をつく。

自分の想いに気付いてからというもの、どんどん周りに嘘をつくようになっていた。

ついた後に残るのは、罪悪感ばかり。

—…段々、自分が嫌になってくる。

「…ふぅ。」

と、無意識に短い溜め息が出ていた。

溜め息の数も最近増えた気がする。

隣りでは、鈴が心配そうに此方を見ていた。

その時、横にいた女子達が、鈴の方を見てクスクスと笑い、わざと本人に聞こえるくらいの声の大きさで、悪口を言っているのが耳に入った。

『……。』

鈴の表情は寂しそうだった。

そしてまた思い出される、彼の言葉。

『女子に妬まれる事が多くて―…』

「……。」

隣りで、鈴が寂しそうに笑って言った。

『私、あまり女子のみんなと仲良くないの…。…でも、神楽ちゃんは、そんな私と普通に接してくれるから、凄く…嬉しいんだ。』

「……。」

彼女の手に、手を伸ばした。

『…！』

「…行こっか。教室まで送るアルヨ？」

そう言うと、彼女が凄く嬉しそうに笑った。

『うんッ！』

―…この子はこの子で大変なんだ…。

＊＊＊

「おい、チャイナァ。お前今朝、鈴を教室にまで送ってくれたらしいじゃねぇか。」

「……そうだヨ、悪いアルか？」

昼休みに入り、購買にパンを買いに行こうとすると、彼がドアの所に立っていて、私にそう話し掛けて来た。

「鈴、かなり喜んでたぜィ？チャイナにも、珍しく優しいところあるんですねィ。」

「…最後、余計ダロ。」

—…言い方が、ムカつく…。

最近彼との会話は鈴の事ばかりであった。

仕方ない、ってわかっているのに…彼が鈴の話を嬉しそうにする度に、胸は針が刺さっているかのように痛かった。

「…私、購買に行くから、用ねーならそこ退くヨロシ。」

「何買うんですかィ？」

―…は？

「何でそんな事、お前に教えなきゃいけないネ。」

「いいから。」

―…何がだ…。

仕方なく答える。

「パンと飲み物…。」

「丁度いいや、手ぇ出せ。」

「……？」

ポン、と何かを手に置かれた。

―…？

「これ、今朝のお礼でさァ。」

見ると、購買で買って来たのであろう飲み物が、手の中にあった。

「…べ、別にいいアル！」

貰った物を突き返した。

「…はぁ？何でィ。どうせ買うんだろィ？貰っとけよ。」

―…こんな事しないでよ。

「いいアル！それに私、これ好きじゃないネ！」

「てめ…、人の親切を―…」

無理やり彼に返して、走って教室から出た。

―…ほんと、困るんだってば。

涙で目の前が霞む。

―…これ以上、優しくしないでよ…。

第6話

—…どうして、私じゃ駄目なんだろう。

放課後。

今日も、土方の部活が終わるまで待っていた。

窓から野球部の練習を見る。

—…あ…、トッシー。

オレンジ色のグラウンドに、土方の姿を見つけた。

―…早く終わらないかなぁ。

チラッと校庭に視線を移す。

―…もう、帰ったのかな。

あの日、今まで見た事がない彼の笑顔を見た。

思い出すと、今でも胸が苦しくなる。

もし、彼が彼女と付き合わなかったら…―

こんな、苦しい想いはしなくて済んだのかもしれない。

もし、前までのように過ごしていたら、彼の隣りは私だったのかな。

もし、彼と付き合えたなら、彼の隣りで笑えていたのかな…。

絶える事のない、“もし”という言葉。

“仮”にでしか、叶う事のない理想。

—…考えるだけ、虚しくなる。

そう考えていた時、

カタン…

と、後ろから物音が聞こえた。

―…トッシー…かな？

「ト…―」

最後まで声が出なかった。

目の前に立っていたのは、黒髪じゃなくて、亜麻色の髪の男―…、

彼だった。

「…ッ……。」

昼休みの事もあって、何だか気まずかった。

蘇芳色の瞳と目が合う。

「…まだ、帰っていなかったんですかィ？」

突然の質問に少し驚く。

「……そっちこそ。」

―…もう、とっくに帰っている時間の筈なのに…。

「…鈴……ちゃん、は？」

私のもとに近付いて、近くの席に座る彼に、そう聞いた。

「…鈴は早退しやした。」

「え…！？具合悪いアルか？」

「いや、…なんか家庭の事らしい。」

「そう…アルか。」

―…何か、あるのかな。

そう考えていると、彼が声を出した。

「…お前、これから帰るんですかィ？」

「…そうアルヨ。」

空を見ながら、彼の質問に答えた。

―…思ったより気まずくなくて良かった。

そう、思っていた。

「久し振りに、送ってやましょうか？」

―…え？

「…は？」

思わず振り返る。

「今日は、もう鈴帰ったし、チャイナが今帰るなら、送ってってやりまさァ。」

―……。

「……いいアル。」

「……は？」

―…何で、今更。

「…いいってば。」

「てめ…、今日で2回目ですぜィ…？俺の親切心を―…」

―…止めてよ！！

「余計なお世話アル！！」

声の大きさに、自分でも驚いた。

その時、ドアの方から彼の声ではない、別の男の声が聞こえた。

「…おい、帰んぞ。」

ドアには、黒髪の男が立っていた。

「トッシー…！」

急いで土方のもとに駆け寄り、後ろに隠れた。

少し驚いたような表情の土方。

「……土方さん、あんた…いつもチャイナと帰ってるんですかィ？」

教室に、彼の声が響く。

「…ああ、誰かさんのお蔭でな。」

「……。」

「ほら、帰んぞ。」

そう言って、土方は私の頭を、この前と同じようにぽんぽんと軽く叩いた。

—…何でかな、凄く…安心する。

「…うん。」

「じゃーな、総悟。」

「……。」

彼は土方の挨拶に返事をせず、ただ黙っていた。

帰り際に彼の方をチラッと見ると、蘇芳色の瞳が、此方を見ていた。

「ッ……―！」

吃驚して、慌てて目を逸らした。

―…何だか、気が…重いよ。

第7話

いつもと同じ時間に登校した。

―…大丈夫、かな…。

『余計なお世話アル！！』

昨日、無意識のうちにそう叫んでいた。

今まで貯まっていた苛々が、爆発したのかもしれない。

「はぁ……。」

と、小さな溜め息をつきながら、教室の中に入り、自席に目をやった。

「……――。」

――……何で…。

自席の隣りで、机の上に突っ伏している彼の姿があった。

――……まだ、登校する時間じゃないのに。

昨日から、彼と今日どの様に接すればよいだろうか、とばかり考え

ていた。

そして、まだ考えもまとまっていないのに、彼が自分よりに早く登校していたのだった。

—…どうしよう。

心臓の音が五月蝿い。

—…いつも通りに。

そう自分に言い聞かせながら、1歩1歩、自席に近付いて行った。

机に鞄を下ろすと、ガタンと机が鳴ってしまった。

―……あ。

ヤバい、と思ったのも束の間、隣りで突っ伏していた彼が起き上がり、此方を見た。

いつ見ても綺麗な蘇芳色の瞳。

「……お……―」

“おはよう”、と言いたいのに、言葉が上手く前に出なかった。

1人で慌てていると、

「……はよ。」

と、彼に先に言われてしまった。

「お、おはヨ…。」

彼の声を聞いて安堵した。

“怒っていたら…”と、ばかり思っていたから…―。

ホッとしながら席に着くと、彼が頬杖をつきながら此方をじっと見ていた。

―…な、に？

「な…、何アルか…？」

恐る恐る、彼に尋ねた。

「……。お前さァ、…土方さんと付き合ってるんですかィ？」

彼の唐突な質問に、力が抜けた。

—…何だソレ。

「…付き合ってないアル。」

「んじゃ、何で一緒に帰ってるんですかィ？」

「それは！…ッ―…」

―…お前が私を1人にしたからでしょう？

…そう、言いたかった。

けれど、言ってしまったら、何かが溢れ出してしまいそうで、…怖かった。

今でも、私を捉えて離さない、蘇芳色の瞳。

「…帰る方向、一緒なのトッシーだけだからアル……。」

「ふーん…。わかりやした。」

そう言うと、彼は席から立ち上がり、教室から出て行った。

—……何なの？

ザワザワと騒がしい教室。

—…何で、そんな事聞くの？

みんなの笑い声が遠くに聞こえた。

＊
＊
＊

「…トッシー、酢昆布切れたアル。」

箱から取り出そうとして、今更ない事に気が付いた。

「ほぉー…。」

いつも通り2人で帰っていた。

「何だヨ、その態度は。」

「お前、どうせまた俺に買わせるつもりだろ…。」

そう言われて、少し驚く。

「…何で分かったアルか！？」

「お前、今まで自分で買った事1回もねぇじゃねーか！！」

土方の言うとおり、今までの酢昆布は全部、土方に買わせたものだった。

「いいじゃねーかヨ、ケチ！！」

「お前、たまには自分で買え！！」

ぎゃあきゃあと言い争ったが、結局、土方がまた買う事になった。

「酢昆布ばっかの出費ってどうよ……。」

と、土方が財布を見ながらそう呟いた。

その隣りでニヤニヤと笑う自分。

その時

『土方さんと付き合ってるんですかィ？』

ふと、あの言葉を思い出した。

「……。」

―…他人から見ると、付き合っているように見えるのかな…。

じっと隣りを見る。

―…そういえば、トッシーって…。

それに気付いて、土方が此方を向いた。

「…？…何だよ。」

「トッシーって好きな人いないアルか？」

「……は？」

「だから、好きな人。」

「ちょっと待て、いきなり何なんだ……―」

「だって、トッシーの色恋沙汰って聞いた事ないネ。好きな人くらい、いないアルか？」

「だからってなぁ……―」

「いいから答えるヨロシ！」

そう言うと、土方は短い溜め息をついた。

「……　居ねーよ。」

そう言う土方の顔は、少し赤みを帯びていた。

―…分かりやすい…。

ニヤリと口元が笑った。

「へぇえーー。」

「てめ…！」

ますます赤くなる頬。

「トッシー、顔真っ赤アルヨー？」

「うっせぇ！！こっち見んな！！」

逆切れした土方が、私の頭を掴んで、下を向かせようとした。

自分も負けじと抵抗する。

ぐぐぐぐ…

「こっち見んじゃねぇ！」

「だったら、好きな人教えるヨロシ！」

長い間2人で揉めていると、私達の横を1台の自転車が通り過ぎた。

『あ！』

聞き覚えのある声。

土方も私も、動きが止まった。

自転車に乗っていたのは鈴だった。

『神楽ちゃん、バイバーイ！！』

と、自転車の後ろに乗り、手を振る彼女。

「あ…、バイバイッ！」

慌てて手を振り返す。

鈴の後ろに見える、亜麻色の髪。

そして、彼の瞳が此方を見ていた。

「…ッ……――。」

ドクン、と鳴る心臓。

―…どうして…？

あの時の彼の視線は、凍えるように冷たかった。

第8話

朝から降り続く雨。

「うわぁ…、凄い雨アル。」

玄関から出て、外を見ながらそう呟いた。

―…昨日はあんなに天気が良かったのに…。

「神楽ー、置いてくぞー。」

と、下から聞こえて、慌てて階段を下りた。

「銀ちゃん、待ってヨ！」

「ちょっ…！お前押すなって！！服濡れちゃうから！」

傘が１つしかなかったから、銀八と相合い傘をして登校した。

「そういえば、神楽の分の傘まだ用意してなかったんだよなぁ…。帰りにでも買ってきてやるよ。」

「いいヨ、自分で買って来るネ。銀ちゃん、…センス悪そうネ。」

「ひど！」

「まぁいいから、お金頂戴ヨ。」

そう言って、片手を銀八に差し出した。

「…何事もなかったように…―」

と、銀八はブツブツ言いながら財布を開いていた。

雨の日は、何だか嫌な事が起きる予兆のようで、昔から好きではなかった。

＊
＊
＊

教室に入って、周りを見渡す。

―…あ！

「トッシー！」

土方の姿を見つけて、彼のもとに駆け寄った。

土方は少し驚いたような表情をしていた。

「…何だよ？」

「今日の帰りに、傘買うの付き合ってヨ。」

「はぁ！？何で傘…？朝どうやって来たんだよ。」

「銀ちゃん、私の傘用意してなかったネ。朝は銀ちゃんの傘に入れて貰ったアル。」

そう言うと、土方は呆れた顔で短い溜め息をついた。

「…分かったよ。」

返事を聞いて安堵した。

—…良かった。

外では、まだ雨が途切れる事もなく降り注いでいた。

＊　＊　＊

「まだ……、止まないアル…。」

授業が終わり、放課後の教室で土方が来るのを待っていた。

「……。」

—…今日、1回も話さなかった…。

窓を見ながら、そう考えていた。

昨日の帰り道での事が、脳裏にしっかりと焼き付いている。

「……。」

彼の後ろにいた鈴に対する悔しさよりも、あの時の彼の冷たい視線が、どうしても腑に落ちなかった。

—…何でだろう。

その事がなんとなく気まずく思い、今日1日、彼に話し掛けられなかった。

―…馬鹿騒ぎしてたから？

未だに、彼の心情を理解する事は出来なかった。

どうして、彼は怒っているのか…、と。

―…あ…。

窓越しに見える、彼と鈴の姿。

「……。」

どのくらい彼を想えば、彼は私を見てくれるのだろう…。

「……。」

窓から離れ、自席に着こうとした。

コン…

―……？

靴に何かが当たり、床を滑った。

しゃがんで、それを掴む。

「……コレ……―」

手にしたのは、小さな消しゴムだった。

―……サドの、だ。

消しゴムには、私が以前、悪戯して書いた“馬鹿サド”という文字。

―…まだ、使ってたんだ…。

それだけで、心が温かくなったような気がした。

―…そういえば、書いたのバレた時、アイツ凄いキレたんだっけ。

あの時を思い出して、クスリと小さく笑った。

今となっては、楽しい過去の思い出に過ぎなかった。

「……。」

手の中の消しゴムを見つめる。

―…ないと困らないかな。

トクトクと、全身に木霊する心臓の音。

―…家で勉強する時に使うかもしれない。

「……。」

―……うん。

すくっと立ち上がって、教室から飛び出した。

階段を駆け下りる。

廊下を曲がる度に、『キュッ』っと聞こえる靴の音。

玄関まで、全力で走った。

“もしかしたら、話せるかもしれない”という、淡い期待を胸に抱いて…―

「そういえば傘ないんだったアル…。」

さっきよりも更に、雨が酷くなっていた。

校庭には先程までいた2人の姿はなく、ただ雨だけが降り注いでいた。

―…直ぐだから大丈夫。

そう思って、勢い良く外へ飛び出した。

―…思ったよりも強いな。

体に当たる雨の強さに驚く。

正門を出ると、２つの傘を見つけた。

―…あ！

「サ…――」

呼び掛けようとした声が、途中で切れた。

ザーーという、さっきまで五月蝿いほどに聞こえていた雨の音も、今では聞こえない。

濡れないようにと握り締めていた手から、消しゴムが落ちて、地面で1、2回跳ねた。

「……。」

目の前の光景から、目を逸らしたかのに、…出来なかった。

目の前で、

彼が鈴に

キスしていた

バシャバシャ…

後ろから、何かが近付いて来る音がする。

そして、いきなりガッと腕を掴まれた。

「馬鹿野郎！！傘持ってないのに何で外に出てんだよ！！」

そう叫んで、後ろから傘を傾けていたのは土方だった。

「教室に居ねぇと思ったら、外にいるし…何考えてんだよッ！」

—…あれ…、私、どのくらいの間此処にいたのかな…。

正直、あの光景を見てからの記憶がない。

ただ分かるのは、頬を雨ではない、熱いものが途切れる事なく流れている、という事だけだった。

「おいッ！聞いてんのか！？」

「…ッ……――！」

突然、土方に顔を覗かれ、咄嗟に顔を背けた。

――…こんな情けない所、見られたくない。

「お前、何で泣いて……―」

「―……ッ違うアル！！」

そう叫んで、私の腕を掴んでいた土方の手を払った。

「泣いてないヨ！これは雨アル！！」

「……。」

暫くの沈黙。

ガッ…

「……！」

地面に落ちた傘の音に、ビクッと体が反応した。

背を向けていた私の肩を、土方が掴んで自分と向き合わせた。

「…―！！」

―…顔、見られたくない…ッ！！

「や…ッ――」

“やだ”と、言おうとしたが、最後まで出なかった。

土方に、抱き締められていた。

「……泣けよ。」

—…え…？

「我慢してねぇで、悲しい時くらい、声上げて泣け。」

—…どうして…？

「……どうせ、雨で聞こねぇし。」

「……―ッ……ぅあ、ぁ。」

―…どうして、あなたはそんなに優しいのですか…？

その日は、雨の中で、大声を出して泣き続けた。

土方は、そんな情けない私を、泣き終わるまで抱き締めていてくれた。

どうして私は、彼に恋をしてしまったのだろう。

どうして私だけ、こんな目に会わなくちゃいけないのだろう。

“恋をする”なんて、ただ悲しいだけだ……—

第9話

これ以上、彼を想い続けても、意味があるのかな……―

ガヤガヤ…

朝から教室は賑やかだった。

「……。」

―…早く、時間が過ぎてしまえばいい。

昨日の光景が、ずっと脳裏を掠めている。

―…思い、出したくない…。

そう思っても、体は言うことを聞いてはくれなかった。

本当は、今日学校に行くつもりはさらさらなかった。

あの2人に会いたくないから…。

けれど、結局は銀ちゃんに連れて来られてしまった。

―…アイツが来たら、どうすればいいの…？

登校してから、そんな事ばかり考えていた。

すると不意に、後ろから頭を軽く叩かれた。

「……！」

―…もしかして…。

更に加速する鼓動。

恐る恐る後ろを向くと、そこには土方が立っていた。

「朝っぱらから、何シケた顔してんだよ。」

頭を叩いたのが土方だと分かり、安堵した。

「…おはヨ、トッシー。」

唯一、昨日私が泣いていた事を知る人物…。

「……。別に何でないアル。」

と、笑ってみせた。

「……そうか。」

土方には、何だか全てを見透かされているようで、…恥ずかしかった。

「あー、そういえば……―」

―…？

そう言って、土方はゴソゴソと鞄の中から何かを取り出した。

「…やる。」

ポンと、手に何かを置かれた。

「……これ。」

手には酢昆布の箱があった。

「な…、何でアルか！？」

「別に…、ただ安売りしてたから買っただけだ。」

―…駄菓子屋で安売りするなんて聞いた事ないよ…。

クスッと笑った。

―…いつも買うの嫌がってたくせに。

「ありがとネ、トッシー。」

―…昨日も。

そう言うと、土方の頬が少し染まった。

「お礼言われる程じゃねぇよ…。」

「…トッシー照れてるアル。」

ぷぷ…と笑うと、今度は土方が逆ギレした。

「なっ…、てめ…！」

あははと、今度は声に出して笑った。

—…トッシーといると、面白くて温かい。

そう、思った時だった。

ガタン！

という音が、いきなり耳に入って来た。

「おはよーごぜぇます、土方さん、……チャイナ。」

ドクン……―

彼が、…登校して来た。

「はよ。」

土方が先に挨拶した。

―…いつも通り、いつも通り…。

そう思ったのに、言葉が出なかった。

「……朝っぱらから熱いですねェ。」

彼がわざとらしく、そう話し掛けた。

ドクン…―

「…そんなんじゃねぇよ、…お前と違って。」

ドクン……―

「……そーですかィ。」

不意に、土方にまたあの時と同じように、ぽんぽんと頭を軽く叩かれた。

少し、体が反応する。

「じゃあな、今日の帰りに傘買うの付き合ってやるよ。」

そう言い終えて、土方が自席に行こうと、私から離れようとした。

―…やだ…。

手を伸ばす。

―…1人に、しないで。

「…！……どした？」

無意識のうちに、土方の袖を掴んでいた。

「あ…、え、と……。何でもないアル！…ごめんネ。」

掴んでいた袖を、パッと離した。

「…あぁ。」

そう言って、土方は自席の方に向かって行った。

＊　＊　＊

―…どうしよう。

彼が隣りにいるだけで、胸が苦しかった。

息が荒くなる。

思い出したくもない昨日の光景が、また脳裏で何度も巻き戻される。

―…いっその事、諦めてしまえば…。

チラッと隣りを見ると、…彼と、目があった。

ドクン……―

「…何ですかィ？」

ドクン……―

バッと顔を背ける。

―…やだ。

「おい…、無視すんな、馬鹿チャイナ。」

―…やだ、止めて…。

「チャイナ…―」

「……ッ！」

―…止めて！！

その時、チャイムがなり、ガラガラと教室のドアが開いた。

「おらー、席につけー。」

銀八…、担任が来たのだった。

―…助かった…。

ホッと安堵する。

すると、今度は銀八と目が合った。

―……？

変な表情で私を見つめる銀八。

―…な、に？

「神楽、大丈夫か…お前。」

「…へ？」

「かなり、顔真っ青だぞ…？」

―…え…。

「お前1時間目出なくていいから、保健室行ってこい。」

「…あ！それじゃあ、私が保健室まで送ります。」

と、そよが手を上げて言った。

「ああ、頼む。」

そして結局、そよに連れられて保健室に行く事になった。

＊　＊　＊

ピピピピピ……

という、小さな音。

体温計の数字を見ると、『３８．７』と表示されていた。

―…熱、あったんだ…。

「何度でしたか？」

と、まだ一緒にいてくれたそよが聞いた。

「３８．７…アル。」

「え…ッ！？、高熱じゃないですか！早退した方が…―」

そよの言葉を、慌てて遮った。

「いいヨいいヨ！私、人より回復するの早いし…、寝てれば治るアル。」

―…それに、家までなんて歩けないと思うし…。

「…そよちゃん、ありがとネ。もう教室戻って大丈夫アルヨ。」

「え…、ですが……――」

何か言いた気なそよ。

「……分かりました。」

どうやら諦めたようだった。

「後で、また様子見に来ますね。ゆっくり休んで下さい。」

「…うん。」

そう言い残して、そよは保健室から出て行った。

「ふぅ……。」

頭がクラクラする。

関節も少し痛む。

―…熱出てたなんて…。

顔が真っ青だったのは、サドの事でそうなったのだと思っていた。

―…昨日、雨に当たったからな…。

「……。」

また、脳裏を掠めるあの光景。

「……ッ…。」

目に手を置いた。

頭より、関節より、胸が1番痛む…。

―…寝よう。昨日、あまり寝てないし…。

そう思って、私は深い眠りについた……――

＊
＊
＊

――――……？

額に何か、置かれているのが分かった。

―…冷たい…。

虚ろな目を開く。

視界には、ぼんやりと人影が映っていた。

『また様子見に来ますね…―』

さっき、そよが言った事を思い出す。

「…そ……よ…ちゃん…？」

「……。」

人影からは返事が返って来なかった。

―…誰…？

段々、意識が遠退いて行く。

それと同時に、額に置かれていた手が下へと下がり、目を隠された。

意識が更に遠退く中で、１つだけ…覚えている事があった。

目を隠された後に、微かに感じた、額に温かくて柔らかい感触…―

目からゆっくりと手が離れて、足音が遠退いていくのが聞こえた。

―…待って、…行かないで…ッ……――

「やっと起きたか…。」

ハッと、目を覚ますと、土方が此方を見ていた。

「トッシー…？…ッ……―」

起き上がろうとすると、関節が痛んだ。

「いい、寝てろ。」

言われた通りに、またベッドに横になった。

「ごめ……―」

そして、ふと思い出す、あの意識が朦朧としていた時の出来事。

「……。」

「…どうした？」

「…トッシー、さっきも様子見に来てくれたアルか…？」

そう聞くと、土方は不思議そうな顔をした。

「いや…、今来たばっかりだけど…。」

—…それじゃあ…。

「何かあったのか…？」

「…ううん！何でもないアル。気のせいみたいネ！」

―…さっきのは、…誰？

第１０話

―…トッシーが居るって事は…。

「…もう、放課後アルか？」

「いや、今４時間目。」

「あ…、そうアルか！寝過ぎたと思ってびっくりしたヨ…―」

―…あれ……？

じっと土方を見る。

「…何だよ…？」

「……トッシー…、授業は…？」

「あー…、サボり？」

「なっ…！、風紀員が何してるアルか！？」

「何って…、見舞い……―」

「そんなの後ででいいヨ！もう教室戻れヨ！」

そう言うと、土方の表情が少し歪んだ。

「……別にいい。それに、俺もそんなに体調良くねーし。」

「…え…。」

—…あ…。

昨日雨の中で、土方が私が泣き終わるまで抱き締めていてくれた事を思い出す。

「…ごめんネ。私のせい……」

「お前のせいじゃねぇよ。」

言葉を土方に遮られた。

「俺が勝手に雨に濡れただけだし…。」

――…何で、かな。

「…ねぇ、トッシー……」

「…あ？」

―…何で…。

「…何で、そんなに私に優しいアルか…？」

窓から入って来た風が、カーテンをふわりと浮かす。

カーテンは暫くの間舞っていたが、やがて寂しそうに舞うのを止めた。

「……。」

暫く続く沈黙。

―…変な事、聞いたかな…？

そう思った時、土方が声を出した。

「―……だから…。」

―……え？

小さくて聞き取れない。

そして、もう1度、土方が口を開いた。

「…お前が…、好きだからだよ。」

「……え…？」

突然の告白に驚き、どうすればよいか分からなかった。

「え…、え、あの…―」

「あー、いい。返事はいらねーよ。」

片手で前髪を掻き上げながら、土方はそう言った。

「え…―」

「…お前、総悟が好きなんだろ？」

ドクン、と木霊する心臓の音。

―…気付いて、たんだ…。

「…トッシー…、ごめんネ…。」

「……気にすんな、俺が勝手に好きになっただけだし。」

「でも、でも…！……―」

ベッドの上にポロポロと涙の粒が落ちては、すぐに消えて、丸い跡が残った。

「泣くなよ…。」

土方の手が、私の頬を伝う涙を拭う。

―…恋愛なんて、やっぱり人を傷付けるだけだ…。

＊　＊　＊

泣き止んでから、暫く経った。

隣りにはまだ土方がいた。

「まだ調子悪いか？」

「…え、と…―」

―…なんか少し、気まずい…。

「ちょっと…頭クラクラするネ。」

「んじゃ…―」

そう言って、土方はしゃがんで私に背を向けた。

―…？

「ん。」

「へ…？な、何？」

「乗れ。」

―…！？

「…な、なな何でッ！？」

突然の事で驚いてしまった。

「お前、早退しろ。鞄も持って来たし。どうせ家まで歩けねぇだろ？」

「そ、そうアルけど……―」

「おぶってやるから乗れ。」

「……。」

―…仕方ない、か…。

結局、土方の言うとおりにする事にした。

「私、重いアルヨ！！絶対重いからネ！」

「わぁーったって！いいから早く乗りやがれッ！！」

ぎゃあぎゃあと騒ぎながらも、どうにか土方が私をおんぶした。

「…普通、おんぶするまでにこんなに疲れるか？」

「……きっと、私達が可笑しいアル…。」

「そうだな、絶対…。」

そう言い合いながら、保健室から出て行こうとした。

その時、

ガラッとドアが開いて、そこには彼が立っていた。

「……！」

「…何だよ、総悟かよ。お前、授業はどうした？」

「授業なんてとっくに終わりましたぜィ？今はもう昼休みでさァ。
…土方さんこそ、４時間目休んで何してんでィ……。」

バチッと彼と目が合い、慌てて土方の後ろに隠れた。

「……。」

「…調子良くねぇから、保健室にいたんだよ。」

「……そーですかィ。…んで、そんな恰好でどちらへ？」

「コイツを家まで送んだよ。」

「…へぇ。調子悪いのにですかィ…？」

土方の後ろで、心臓がドキドキと五月蝿かった。

―…早く、此処から逃げたい…。

「……。俺もどうせそのまま家に帰るからな。じゃーな、総悟。」

「……そうだ、チャイナ。」

「…！！」

いきなり彼に話し掛けられて、ビクッと体が反応した。

「さっき、俺が様子見に行ったの気付きやしたか？」

――……さっき…？

ふと甦る、意識が朦朧としていた時の記憶。

額に、僅かに残った温かく柔らかい感触……――

「……――――！！」

思い出して、顔がカッと熱くなった。

「……？話終わったか？帰るぞ。」

土方がまた前に歩き始めた。

「気を付けて下せェね、土方さん。」

後ろから聞こえる、彼の声。

私は、土方の後ろで動揺を隠しきれなかった。

—…何で、あんな事…。

額に手を当てると、まだ熱っぽかった。

―…熱い、よ…。

これ以上、私を困らせないで…―

第11話

―…何で、あんな事したの…？

布団の中でずっとそればかり考えていた。

―……。

額に手を伸ばす。

触るとまだ少し、熱っぽかった。

結局、風邪を引いていたらしく、1日では熱が引かなかったから2日学校を休んでしまった。

銀八が出て行った家の中は静まり返っていて、寂しくて、まだ教室のガヤガヤと五月蝿い方がマシだった。

けれど……―

―…学校、行きたくない…。

学校に行けば彼と会ってしまうから…。

―…どうせ今会ったって、無視してしまうだけだ。

『無視すんな……―』

彼の言葉がリピートする。

―…無理だよ…。

そしてまた思い出す、保健室での出来事。

―…鈴ちゃん、いるくせに…。

「何で……―」

ピンポーン…

そう考えていた時、チャイムの音が部屋に鳴り響いた。

―……誰…？

まだ熱っぽい体を起こして、玄関へと向かった。

「誰アルか…―！…」

ドアを開けると、男が1人立っていた。

「よぉ、調子どうだ？」

「トッシー…！」

立っていた男は土方だった。

「何で！？学校は？」

「学校はもう終わった。様子見に寄ったんだよ。」

―…え。

「もう、そんな時間アルか…？」

時計を見ると、針が６時を示していた。

「ほら。」

そう言われて、手に袋を渡された。

「え…、これどうしたアルか…？」

「見舞い品。」

袋の中には風邪薬や蜜柑、酢昆布などが入っていた。

「それ、俺とそよから。」

「…ありがと。嬉しいアル。」

涙が出そうになるのを必死に我慢した。

—…やっぱり、トッシーは優しい。

「それじゃあな、元気になったら学校来いよ？」

「うん…。」

そう言って彼は帰って行った。

パタン…

と、ドアを閉める。

—…どうせ好きになるなら、トッシーだったら良かったのに…。

そう思っても、心の何処かでは彼を好きでいる自分がいる。

—…私、最低だ…。

壁に凭れて、袋を抱いて泣いた。

＊　＊　＊

「３６．５度……お、熱下がったみてぇだな。…どうする？明日から学校行くか？」

学校から帰って来た銀八が、体温計を見ながら、そう私に話し掛けた。

「うん…、明日から行くヨ。」

—…もう、心配かけたくない…。

「そうか。んじゃ、今日は明日に備えて休んどけ。」

そう言って、銀八が私の頭を撫でた。

「…うん。」

—…明日は、アイツと上手く接する事が出来るのかな…。

第１２話

久し振りの登校。

今日の空は雲１つなく、青く澄み渡っていた。

―…そういえば…。

前までは、サドや私の姿を見つけた途端に、駆け寄って来ていた鈴の姿を、最近見なくなった。

自分が彼女に会うのに勇気がなくて、いつもより早く登校していた事も、関係しているとは思うけれど…。

携帯を開いて、時間を確認する。

―…今日はいつも通りの時間なのに…。

「……。」

―…後で来るかも…。

そう思って玄関まで歩いて行ったが、結局、彼女は最後まで姿を現さなかった。

＊　＊　＊

教室に入ると、女子が駆け寄って来て、口々に『大丈夫？』と言って心配してくれた。

—…何か、嬉しい。

そう思って自席に着いた。

「はよ。」

と、言う声と同時に頭をコツンと軽く叩かれた。

「おはヨ、トッシー。」

もう、姿を見なくても分かる。

「もう大丈夫なのか？」

「うん、トッシーとそよちゃんのお見舞い品のお陰アル！」

と言って笑った。

―…何だか、久し振りに笑った気がする。

「そうか。」

「うん。」

土方が黙ったまま、じっと私を見つめていた。

―…？

「何か、変アルか…？」

「…いや。」

土方が私の頭に手を乗せて言った。

「…困った時は1人で悩んでねぇで、さっさと相談しろよ？」

―…あ……。

『1人で悩んでねぇで、さっさと相談しろよ…―』

―…あの時と同じ言葉…。

「…うん…ッ。」

―…ありがとう。

それから暫く経って、彼が登校して来た。

カタン、と鳴る隣りの机。

―…心臓、五月蝿い…。

隣りを見ると、彼と目が合った。

「…ッ…―！」

ドクン、と全身に木霊する。

ガタンッと、椅子が派手な音を鳴らした。

…いつの間にか、逃げていた。

教室の外の廊下に凭れる。

手を自分の頬に当てた。

—…熱い…。

逃げるつもりなんてなかった。なのに、体が勝手に動いて、彼から遠ざかろうとする。

額に手を伸ばして触ると、頬と同じくらい、熱を帯びていた。

「……あんな事、…するから…ッ…。」

彼が触れた部分が、火傷したように熱かった…―

結局、その日は『熱がまた出た』と嘘を付き、保健室でサボった。

また嘘を付いた、と心に残る罪悪感。

もう下校時間なのだろう、外からは生徒達の声が聞こえた。

私は1人、ベッドに潜って泣いていた。

そして泣きながら、今までの事を思い出していた。

—…こんな自分、嫌だ……。

ポロポロと涙が流れて、ベッドを濡らす。

こんな辛い想いをしてまで、恋をする意味があるのだろうか。

人を妬んで、人を傷付けて、自分が嫌いになって…—

—…恋なんて、

「…もう、やだぁ…。」

その時、いきなりバッと布団を取られた。

「！？」

驚いて顔を上げると、そこには土方が立っていた。

「馬鹿野郎…、だから相談しろって言ったじゃねぇか。」

「トッシー…！」

そう叫んで、土方に飛び付いた。

土方はしっかりと私を受け止めてくれた。

そして私は、あの雨の日の時と同じように、声を上げて泣き続けた。

―…私はいつから、こんなに泣き虫になったのだろう―…

＊　＊　＊

「トッシー…―」

「あ？」

いつもの帰り道を２人で歩いていた。

「トッシーは何で今もそんなに優しく接してくれるアルか…？私、トッシーの事……振って、傷付けたアルのに……。」

「……。」

暫く間を置いてから、土方が口を開いた。

「…振られた事は何とも思ってねぇよ。それに別に傷付いてもいねぇし…。」

「…え？」

「俺は最初から振られるって分かってたからな。お前が総悟を好きだって知ってて惚れたんだから。」

「……じゃあ、何で…私に告白したアルか？」

何で土方が、振られる事を前提に自分に告白したのか、理解出来なかった。

「…前に進むためだよ。」

「え…？」

―…どういう意味…？

「人間は、自分の都合の悪い事には恐れて近付きもしなくなる。現実を受け止めなかったり、その場から逃げ出したり……―」

―……あ…。

そしてまた、今までの事を思い出した。

「自分を傷付けたくなくて、ずっと現実から避けて行ったっていつかは、その壁を越えなきゃいけねぇんだよ。どんなに深く傷付いたって、どうせまた、嫌でも前に進まなきゃいけねぇんだし。」

涙が頬を伝って、地面に落ちた。

全部、土方の言う通りだった。

受け止められなかった現実から、自分は逃げてばかりいた。

“どうせ叶わないから”と思って、想いを胸の奥に隠していた。

そして時には、自分にとって都合の悪い事を、彼のせいにもした。

さっきだって……―。

ずっとずっと、逃げてばかりいた。

―…何て自分はズルかったのだろう。

「トッシー……。」

私より前を歩いていた土方が振り返る。

「私、…決めたネ。」

—…もう、絶対逃げない。

＊　＊　＊

次の日の放課後、屋上で待ち合わせをしていた。

土方には『きっと遅くなるから』と、先に帰ってもらうようにしていた。

—…来ない…。

携帯を開いて時間を確認する。

待ち合わせ時間より３０分も過ぎていた。

―…何か、あったのかな？

と思った時、キィ、と屋上のドアが開いた。

「あ……。」

『遅れてごめんなさい！！ちょっと用事が入っちゃって…。』

「…ううん、大丈夫アル。」

久し振りに鈴と会った。

「久し振りアルネ。」

『そうだね！』

彼女はいつもと同じように、照れくさそうに笑った。

『昨日、メールもらった時ビックリしたよ。初めてだったから…。』

「そうだったアルネ…。」

メアドは結構前から交換していたが、今までメールは1通もした事はなかった。

『それで、話って何ですか？』

「あの、ネ……」

―…もう、逃げないって決めたんだ。

鈴の長く、綺麗な髪の毛が、風に吹かれて揺れていた。

すうっと、息を吸う。

「私…、前からサドの事…好きだったネ。」

『え……？』

「勝手だって分かってるアル！！…だけど、もう逃げたくないネ…。」

『……。』

「鈴ちゃんには…、ちゃんと言っておきたかったアルから……。本当に、ごめんなさいアル…。」

言い終えて、少し間を置いてから、鈴が口を開いた。

『神楽ちゃん、…そーちゃんから何も聞いてないの？』

―……？

「え…、何を…？」

鈴が少しだけ微笑んで、私にこう告げた。

『私、もう…、そーちゃんとは別れたよ？』

第13話

彼女の言葉に、耳を疑った。

「え……！？」

鈴はいつも通りに微笑んでいた。

「…何で…、そんないきなり…―」

『…謝らなくちゃいけないのは、私の方です。』

―……？

鈴が少し俯いて話し始めた。

『私、そーちゃんと付き合う前から、2人の事は知ってたんだ。…
いつも喧嘩してるけど、お互いをちゃんと理解し合ってるって。』

「……。」

『そんな2人が…、神楽ちゃんが羨ましかったの。』

「……。」

『……だから、私はズルしたんです。』

「え……？」

―…どういう事…？

『そーちゃんが、神楽ちゃんを好きだって気付く前に、告白したの。』

「……そ、……―」

―…アイツが私を…？

「そんな事ないネ！！アイツが好きなのは鈴ちゃんで…ッ！…―」

思い出した。

最近、彼が不機嫌だった事…。

―…やっぱり、それは…

「最近、アイツ可笑しかったネ……。それは、…鈴ちゃんと別れたからじゃないアルか…？」

『……。』

暫くの間、沈黙が続いた。

頬に当たる風が冷たい。

青かった空も、いつしか朱色に染まり始めていた。

『…ううん、違うよ。』

鈴が口を開いた。

『私は、そーちゃんが神楽ちゃんじゃなくて、自分を見てくれるように、って付き合ったんだけど…、逆効果だったみたい。』

「…どういう意味アルか…？」

そう尋ねると、鈴がクスっと笑った。

『気付きませんでしたか？』

「へ…、何に…？」

『そーちゃんは、私じゃなくて、ずっと神楽ちゃんを見てたの。』

—……え…？

“見ていた”と言われても、思い当たるのは凍えるように、冷たい視線だけだった。

「…で、でも……」

鈴が私の言葉を遮る。

『それから、そーちゃんが可笑しかったのは、2人に妬いてたからだよ？最近、神楽ちゃんずっと黒髪の人といたでしょ？』

クスクスと、小さく笑う鈴。

——…それは…。

「だって、……」

―…1人は、寂しい…。

『…ごめんなさい。私が悪いのに…。でも、もう別れたから…。もう気にしないで下さい。』

―…でも、

「鈴ちゃんは…それでいいアルか…？」

『え…？』

「…そんなに、簡単に諦めていいアルか…ッ…！？」

悲しくないのに、いつの間にか涙が出ていた。

『……。』

鈴は困ったように笑った。

『…やっぱり、神楽ちゃんは優しい人だね。』

鈴は制服のポケットからハンカチを取り出して、私に差し出した。

受け取って、涙を拭く。

『初めて会った時から、“絶対いい人だな”って思ってたの。一緒に登校してくれた時も、教室まで、ずっと手を引いて行ってくれた時も…―』

鈴の手に、一粒の涙が落ちた。

『そーちゃんが、何で神楽ちゃんを好きになったか、分かった気がする…。』

「鈴…ちゃん…―」

頬を伝う涙を拭って、鈴が言った。

『……私ね、今日の夜…遠くへ引っ越すんだ。』

「え…！？」

『引っ越す前に、神楽ちゃんに会えて良かった。』

—…そうか。

今まで、朝あまり鈴に会わなかった事を思い出す。

『鈴は早退しやした…—』

『用事が入っちゃって…―』

―…この事、だったんだ。

『最後に1つだけ、我が儘言ってもいいかな…？』

「え……？」

『そーちゃんに、…沖田君に逢いに行って欲しいの。』

―……。

『きっと、待ってるから…。』

そう言って、鈴はにっこりと微笑んだ。

『沖田君の隣りは、やっぱり神楽ちゃんじゃなきゃ駄目みたい。』

「……うん…ッ…！」

—…鈴ちゃん、ありがとう…。

『神楽ちゃん！』

走って屋上のドアへと向かった時、鈴が私を呼び止めた。

『遠回りさせてごめんね…。いっぱい傷付けたりもした、…なのに、神楽ちゃんはこんな私と普通に接してくれて…本当に、本当に嬉しかったの…ッ…。』

鈴の大きな目から、大粒の涙が次々と零れていた。

『もっと沢山話して、もっと仲良くなりたかった……』

＊
＊
＊

涙を手で拭いながら、全力で走っていた。

―…何処…！？

時々転びそうにもなったが、スピードはどんどん加速していった。

教室に着いて、ドアを勢い良く開ける。

「サド…ッ…――」

教室には、彼の姿はなかった。

―…何処に、いるの…？

教室の時計を見ると、下校時間はもうとっくに過ぎていた。

「……ッ…。」

教室から出て、玄関へと向かった。

―…逢いたいよ…。

病み上がりのせいで、すぐ息が切れる。

いつもは全然長く感じない玄関までの廊下が、凄く長く遠くに感じる。

それでも、精一杯走り続けた。

“彼に逢いたい”、ただそれだけのために…―

＊　＊　＊

いつもの帰り道を、久し振りに1人で帰った。

まだ彼を見付ける事が出来なかった。

体力も限界に近付いていた。

―…あ…。

目の前には、いつもの駄菓子屋。

「おばちゃん、アイツ見なかったアルか！？」

流れる汗を拭いながら尋ねると、おばちゃんは困った顔をした。

「アイツ…って？」

「あの男アル！ええっと…、私が最初に一緒にいた奴アル！」

そう言うと、おばちゃんは少し考えてから、「あっ！」と、声を出した。

「あぁ、あの髪の毛が亜麻色の子だろ？あの子ならさっき1人であっちに歩いてったよ。」

と、おばちゃんが彼が歩いていった方を指差した。

「おばちゃん、ありがとネ！！今度、酢昆布いっぱい買うからネ！」

そう言い残して、おばちゃんが指差した方へと、また走って行った。

―…何処…？何処に…。

周りを見渡す。

空は、もうすでに朱色が黒い闇に呑み込まれそうになっていた。

胸がざわつく。

急に自分だけが取り残されてしまったようで、怖かった。

―…早く……ッ！

そう思って、次の角を曲がった時だった。

―……。

目の前に、今まで必死に探していた、彼の後ろ姿があった。

苦しくて、息も出来ないくらい悲しい想いを沢山して、その度に何度も逃げ出した。

“恋愛なんて、なければ良いのに……―”

“恋をする事は、やっぱり悲しいだけだ……―”

と、ばかり思っていた。

―…だけど、もう…逃げない。

私は、前に進む。

第１４話

「サド……ッ…！！」

まだ息が整っていないながらも、彼に向かって叫んだ。

同時に彼の動きが止まり、ゆっくりと振り返る。

――…逢えた……。

それだけで、凄く嬉しかった。

「……何ですかィ？」

蘇芳色の瞳と目が合う。

―…もう、逸らさない。

「…鈴ちゃんと、別れたって…本当アルか？」

そう尋ねると、彼は一瞬だけ驚いた顔をしたが、直ぐいつも通りの顔に戻った。

「…誰から聞いたんですかィ？」

「鈴ちゃんからアル。」

「……。」

彼は暫くの間、少し俯いて私と目線を逸らした。

どちらも動かず、話さなかった。

自分と彼の間の距離が、何だが2人の心の距離のように感じて、寂しい。

「…何で……―」

「……え？」

不意に聞こえた彼の声に耳を傾けた。

「わざわざ、そんな事聞くためだけに追い掛けて来たんですかィ…？」

「え…？」

「今まで散々、人を無視してたくせに…。」

「それは…ッ！……―」

―…待って…。

「人の顔見る度に、逃げてくし……」

―…違う、本当は…。

「……そんなに、…俺の事嫌いかよ…。」

「…ッ違うアル！！」

声が、周りに響いた。

「……た、確かに今まで沢山、サドの事無視したネ…。顔合わせる度に逃げたり、隠れたりもしたアル…。」

段々前が霞んで、彼の姿がぼやけて見えた。

震える声を隠そうとしても、無意味なだけだった。

「だけど…、それはサドの事が嫌いだからじゃなくて…ッ……――」

大切な事を言う前に、言葉が詰まる。

――…あれほど、言うって決めてたのに……。

たった2文字の言葉なのに、声に出なくて…相手に伝える事が出来なくて、ただ…切ない。

「嫌いじゃなくて……」

俯くと、目に溜まっていた涙が落ちて、アスファルトに小さな丸い模様が出来た。

――…どうしよう。

ジャリ…

という音が遠くから聞こえて、その音が段々近付いて来るのが分かった。

そして、その度に涙が次々と溢れ出した。

足音はますます大きくなり、長かった彼との距離は、もうすでになくなっていた。

「チャイナ…。」

「……。」

久し振りに呼ばれた愛称。

—…顔、きっと酷い。

彼に泣き顔を見られたくなくて、顔を上げられなかった。

「……。」

不意に、涙を拭っていた手に、彼の手が触れて、握り締められた。

「…！」

そして、またあの時と同じ感覚が甦った。

意識が遠のいて行く中で、僅かに覚えていた額の温もりが、今…、
しっかりと伝わる。

―…あぁ、そっか…。

額からゆったりと温もりが離れる。

『向き合わなくてはならない……』

思い出す、いつかの自分の声。

ゆっくりと顔を上げる。

「……ひでぇ顔。」

「う、うっさいネ、……馬鹿サド。」

顔を見合わせて笑い、彼が私を抱き寄せた。

―…目の前に君がいてくれるなら…

全身で感じる彼の温もり。

懐かしくて、また涙が出た。

―…言葉なんて、要らないね…。

鈴ちゃんと出会って良かったと、心からそう思った。

妬んだり、悲しくて泣いてしまった日もあった。

でも、彼女に出会っていなかったら、お互い意地っ張りの私達は、

きっと“恋”という感情にも、気付かずに過ごしてしまっていただろう。

遠回りをしたけれど、それでも、恋のつぼみはちゃんと咲いたのだから…。

失恋、嫉妬、独占欲、恋慕、罪悪感…―

色んな感情で、恋をした私達。

時には人を傷付けて、時には人に傷付けられたりもした。

…恋は煩うものだから。

だからこそ、どんなに傷付いても、どんなに逃げたくなっても…―

止められないんだ。

「…帰りましょうか。」

「おうッ！」

左手に伝わる温もりが、いつまでも消える事のないように、しっかりと握り返す。

私達の恋は、始まったばかりだ。

恋つぼみ

第１４話（後書き）

読んで頂き、ありがとうございましたぁー！！

今までの作品の中で、１番の長編でした…Д、）

でも書いてとても楽しかったです∇、＊）

これも皆様のお陰です！

毎日、大勢の皆様がアクセスして下さり、本当に嬉しかったです！

∇'＊）

また、感想を下さった方も本当にありがとうございました！

お気に入り登録も…ッ！

本当に感無量です！！

……が、謝らなければいけない事があります。

皆様お気付きだと思いますが…。

最終話、酷すぎてごめんなさい…ッД、）））↑

いとりは最後で挫けるタイプなので、あんな事になってしまいました…。

反省です。ごめんなさい…。

…まぁ、何はともあれ、『恋つぼみ』完結です！

神楽ちゃんたちの今後は皆様の想像でお願いします↑

最後まで読んで頂き、本当にありがとうございました！

活動報告に、裏話とお知らせを追加したので、よろしかったらそちらもどうぞ＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1510j/

恋つぼみ/沖神/3Z

2010年10月11日06時08分発行